

第2部

1946年～1966年

【戦後復興とともに歩み、 時代を先駆ける】



1949年

大阪および東京証券取引所に上場
船舶用ローラチェーン、ロイド検定に合格

1950年

ローラチェーンを米国へ初輸出

1952年

経営方針とトップモットーを掲げ、従業員に周知を図る
台湾業務処設置

1953年

ローラチェーンのJIS認定工場一号となる

1956年

輸出处を設置。本格的な海外進出を開始
社内報「つばき文化」創刊

1958年

椿寿会（定年退職者の会）発足
自動車用タイミングチェーンの量産を開始

1962年

埼玉工場完成、関東に拠点を置く
米国石油協会（API）から石油作井機用ローラチェーン
の認証取得

1963年

東元電氣廠（台湾）へチェーン減速機の技術を輸出
米国モールスチェーン社と業務提携。減速機などの
輸入販売開始

他社に先かけエンジニアリングプラスチックを活用した
TP型トップチェーンを商品化

1964年

宮住鉄工所（現椿本カスタムチェーン）に出資

1965年

モールスチェーン社と合併で椿本モールス後の椿本
エマソン設立。減速機などを国産化

1966年

椿本説三社長逝去。山中一郎が2代目社長に就任

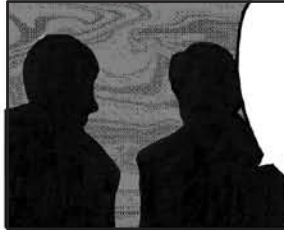
終戦後…
荒廃と混乱の中
一からの出直しを
戦後の日本全体が
余儀なくされていた時代



従業員は何人
残っていることに
なるのかな

ええと
約400
人ですね

一時期は
1300人
いたのですが
…



ようやくかき集めた
資金400万円も
戦時補償特別税で
ほぼ全額徴収されて
しまった



今はフライパンや鋏^{くわ}の
生産でなんとか仕事
にはなつてはいるが…



とにかく

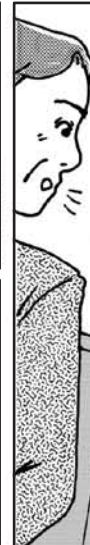
この最悪の事態を乗り
切るためには全力を
尽くすしかない……!



第二工場は
米進駐軍に接收
されてしまった
しな…



説三は現状を
打開するため次々と
改善策を打ち出して
いった



末吉 好一
(後の4代目社長)

機械設備の
拡充が
必要だと
思うのですが

それから
有能な人材の
確保だ

ああ
そうだな



これからの技術
向上のため
有能な技術者を
できるだけ多く
採用するんだ!



社長!



この間
労働組織面でも改革の
手が打たれていた

翌年にも
革新的な労務対策を
次々と打ち出し
ていった

終戦直後の
1945(昭和20)年11月
社員・工員の区別を
廃止して
一律に従業員とし

営業面でも
各地の営業所を整備、
東京営業所に
技術担当者を常駐させる
などセールスネットワーク
を活性化させていった

野口 宙夫
(後の6代目社長)

セールス
エンジニア
だ!

8時間労働制

60歳定年の実施

説三の先見性、
社員たちの不断の
努力によって

ローラチェーンは
飛躍的な発展を
遂げていくこと
になる

普通鋼の
異材混入の
対策を何とか
しないと...

そして
1949(昭和24)年

ようやく
JES(戦時の
規格)破断強度の
ローラチェーンの
生産ができる
ようになったか!!

社長、やはり
火花検査が
重要でしょう

占部 友一
(後の5代目社長)

これで国際
水準ですね

次いで米軍に納入する
土木建設機械用
ローラチェーンで
JES規格より
破断強度が50%も高い
ローラチェーンの
生産にこぎつけた

よし!
化学分析も
一緒に
進めていこう

ああ!

1953(昭和28)年9月

わが国初の
ローラチェーン
JIS認定工場の
荣誉に輝いたのである

これで製品検査を
受けることなく
JIS 適格品を
生産できる工場と
認定された

アメリカ標準
規格(ASA)
の水準まで認定
基準を引き上げ
られたという
厳しい内容なのにも
かわらず……!

これも
みんなの
頑張りの
おかげだ

みんな
ありがとう

戦後の樺本チエーンを
語る上で欠かせない
ものがある
それはマテハン事業だ

マテハン事業の歴史を
語るにはまず
第二次世界大戦前に
逆のぼる……

東北セメント(現・
大平洋セメント)
より総額17万円
相当のコンベヤ
プラント一式を
受注すること
になった

大戦前の
1936(昭和11)年

みんなよく
聞いてほしい

これまでも
バケットエレベータ
などは何件か納入する
ことがあったが

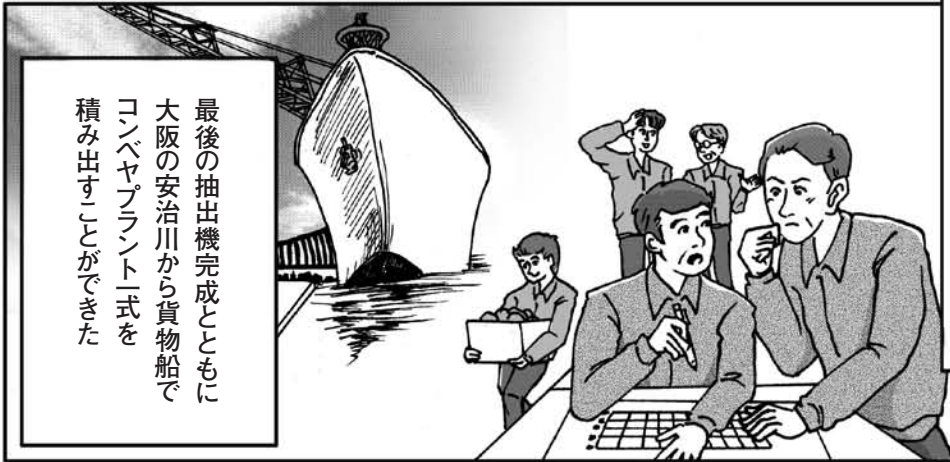
今回のように1工場
すべてのコンベヤ
装置を総合的に
製作するのは
初めてのことで

手狭な南浜工場
だけではかなり
難しいだろう

外注も含め大変な
作業量に
なると思われる

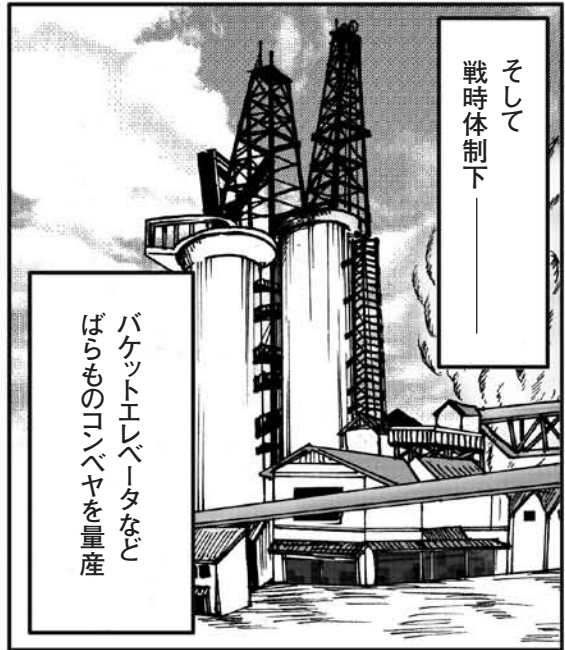
チエーン伝動技術を
活かして
完成・納品まで力を
合わせて頑張つて
もらいたい

こうして残業・徹夜を
繰り返しての悪戦苦闘の末



最後の抽出機完成とともに
大阪の安治川から貨物船で
コンベヤプラント一式を
積み出すことができた

そして
戦時体制下――



バケットエレベータなど
ばらもののコンベヤを量産

最近は注文を
こなしていくので
精一杯だな



用途がほとんど
"ばらもの"に
限られていて

新しいコンベヤ技術を
開発していくまでは
手が回らないのが
残念だが...



そして終戦――



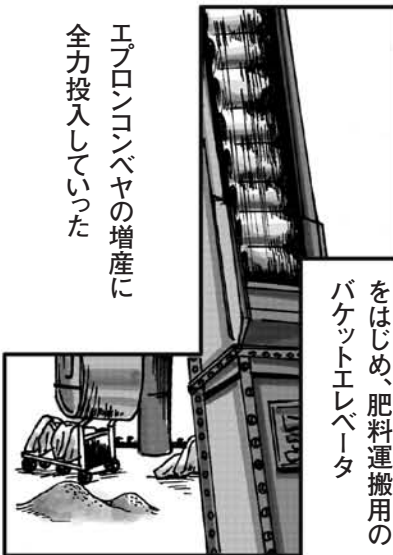
経済復興のために
石炭・肥料が重点生産
されていくようになる



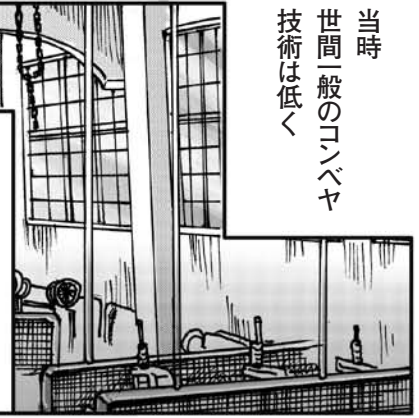
その波に乗り、
炭坑用の切羽用チェーン
をはじめ、肥料運搬用の
バケットエレベータ



エプロンコンベヤの増産に
全力投入していった



当時
世間一般のコンベヤ
技術は低く



つばきのバケット
エレベータは
高く評価され



肥料ブームとともに
バケットエレベータは
時代の花形商品に
のしあがった

戦後復興気運が
盛り上がってきた
1947(昭和22)年ごろ



昭和電工鹿瀬工場から
上り斜面60mの
特殊エプロンコンベヤを受注

エプロンコンベヤは
新規に
作るんですか？



いや、
客先使用中の
スウェーデン製
スチールベルトコンベヤ
を改造するんだ



なんだか
新作するより
面倒そうですね

しかしこれが
うまくいけば
つばきの技術が
外国製のものを上回る
という証明になる



つばきの意地にかけて
みんなで一丸となって
当たろう！



社員たちの試行錯誤の
努力により成果が現れ、
注文が相次いだ

つばきの技術課員、
営業部員の自信と
誇りをもたせる
契機となった

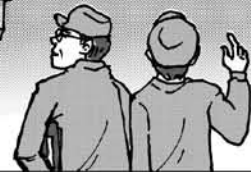
いわば
コンベヤ発展の中で
忘れることのできない
仕事であった



他にも
製紙工場への原木
運搬の合理化を図った
装置一式を納入

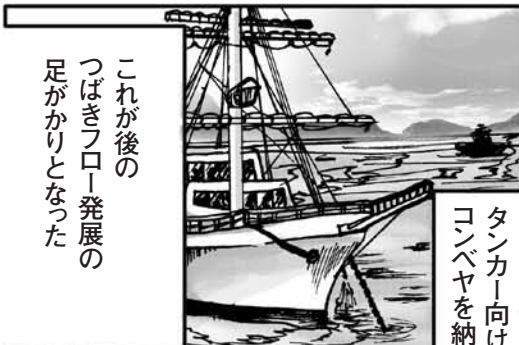


長距離チェーン
コンベヤの先駆的な
役割を果たした



1949(昭和24)年

ばらものを垂直に運ぶ
バケットエレベータ技術を
確立していく一方で、



これが後の
つばきフロー発展の
足がかりとなった



平面や斜面での
スムーズな運搬に向け、
トラフチェーン
コンベヤのさらなる
改良を行っていった

そうした中、セメント
会社の高度な技術要求
にも見事に応え、
セメントのばら積み
タンカー向けのチェーン
コンベヤを納入



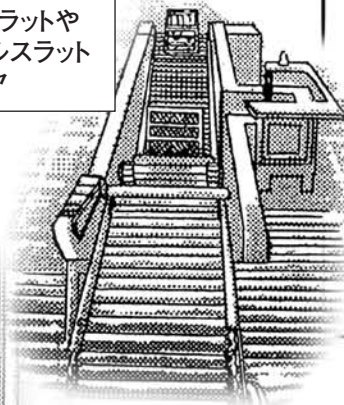
フラッシュ
現象も観察
できましたね！

チェーン速度や
羽根の角度に
関係する資料が
届きました



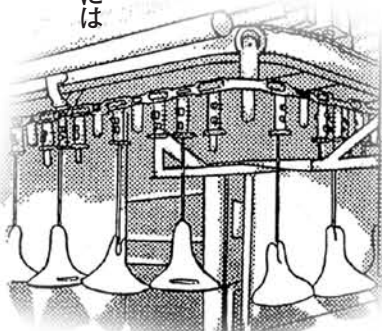
また
かすものコンベヤの注文も
徐々に増え始めた

ウッドスラットや
スチールスラット
コンベヤ



トロリーコンベヤ

コンベヤ部門は予想
以上の成長を示し
1954(昭和29)年には
3億7000万円と
驚異的な
進展を見せたのである



産業界の
設備復興の気運に
あおられた時代を経て

1955(昭和30)年
以降は思想革命・技術
革新の大潮にもまれ高度
成長時代へと突入した

運搬機械業界も下積み
から主役産業として
世の中の関心を集め、
1961(昭和36)年
にはコンベヤ事業部
設立につながった



最近では欧米
先進国の方式
導入による所が
大きいな

ん？



とにかく今は
「大量生産！」
の時代です
からね

なるほど



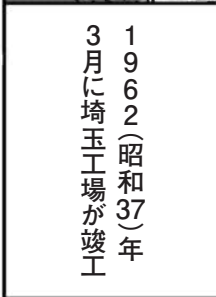
好景気と
反動不況など
激しい景気変動の中



これで当社
も大々的
に関東
進出だ！



1962(昭和37)年
3月に埼玉工場が竣工



すべてが順風満帆と
思われたが、
1966(昭和41)年
初代社長椿本説三が逝去



創業50周年式典の
2力月前という
急な計報に
社員の悲しみは
想像以上に
大きかった



その後
後継者として
山中 一郎が社長に就任



というわけで
これからの
展望として

「10年1日のごとく
同じチエーンを作らず」
を掲げたいと思う



2代目社長・山中 一郎

創業者の遺志を継ぐ道は
技術革新時代に対応した
「新しい製品を生み出して
いく意欲と能力を持つ」
ことであると私は
思います

同時期
つばきグループの強化も
積極的に図られた



すでに1964(昭和39)年
から系列下にある
株式会社宮住鉄工所(現・
樺本カスタムチエン)に続き、
1968(昭和43)年には
樺本スプロケットを設立



また埼玉工場敷地内に
低周波電気炉による
量産工場をもつ
株式会社樺本共栄鑄工
(現・樺本鑄工)が系列に
加わった



創業者の遺志を継いだ
山中社長の下
新商品開発はもちろん
のこと、国内販売ネット
ワークの充実、協会の
発足にも注力



樺本チエーンはこうして
新たなスタートを
切ったのだった…





1946年

■ バケットエレベータが花形商品に

当時の世間一般のコンベヤ技術が低い中、つばきのバケットエレベータは高く評価され、肥料プームとともにバケットエレベータは花形商品になった。これらの多くは、垂直誘導排出型が主であった。

1947年

■ 鋼材の異材混入との戦い

戦後は、無規格の普通鋼を使っていたため、異材混入による品質不良が発生。そのため毎回、火花検査や化学分析で成分確認を行ってから、使用していた(写真は火花検査による鋼材の選別)。



1951年

■ 35周年慰安旅行を開催

椿本チェーンの創業35周年を記念した慰安旅行を実施。近畿日本鉄道の列車を貸し切って三重県の伊勢・鳥羽方面を周遊(写真は近鉄貸し切り列車内で社長を囲んでのニコマ)。

1965年

■ 米・モールズ社との合併

米国ボルグ・ワーナー社との業務提携を行い、同社の子会社であるモールズチェーン社との合併による椿本モールズ(後の椿本エマソン)を設立(写真はモールズ社社長と歓談する山中一郎)。

